

## 占領期における舞踊の検閲 レビューにおける国家表象と検閲の実態

垣沼絢子（大阪大学大学院）

### 1. 研究の背景・対象・方法

本研究の目的は、舞踊を解釈対象として「読む」ことの実態を考えることである。本研究では、舞踊を「読む」実践の一つとして、占領期日本(1945-52)の舞踊の検閲に注目する。アメリカ国立公文書館および早稲田大学演劇博物館に所蔵されている、GHQ/SCAPによって検閲された台本を手掛かりに、実際の舞踊の検閲において、舞踊の何が、どのように読まれ、あるいは読み替えられ、そして現実に読まれえなかったのか、を検討する。

### 2. 舞踊の検閲台本と検閲方法

占領期の日本では、内務省による戦前の検閲とは異なり、舞踊もまた、GHQ/SCAPによる事前検閲の対象となった。舞踊を上演するためには、演劇と同様に、事前に舞踊台本を提出し、検閲され、許可をもらうという工程が必要となった。

こうした舞踊は主に、歌舞伎舞踊の系譜にあるものか、レビューの系譜にあるものだった。どちらも、近接する演劇の台本の書き方に影響されている。歌舞伎舞踊系の台本には、舞踊が表現する粗筋と、登場人物の背景紹介が書かれている一方、レビュー系の台本では、場面構成だけが記された。いずれも振付や場面の意図、音楽、人の配置などは記されず、検閲の初期と後期の台本を比べてみても、検閲のために、舞踊専用の台本のあり方を構築しようというような動きは見られない。そのため、舞踊の検閲では、台本の検閲だけでなく、通し稽古の見学が、実際の検閲の場となった。

①台本の検閲では、粗筋や登場人物の解説から、その舞踊全体がどのような意図を表現しているのか、どのような社会背景を持った表現なのかを「読む」ことに、焦点が当てられた。

②通し稽古が見学され、音楽、振付、配置、衣裳、身体動作などが、実際の検閲の対象となった。そこでは、身体表現そのものが、実際に何を表現していると言えるかを、具体的に「読む」ことが行われた。

### 3. 台本から何を「読む」ことが出来るのか： 国家表象を読み・表現することの難しさ

①の台本の検閲では、封建思想や占領への言及がないかなど、占領政策上の思想との相違が検閲された。ここでは台本上の言葉が焦点となり、国

家表象の適切さが判断された。ところが実際には、日米の交流地点としてアメリカの舞踊や音楽を活用したレビューが修正されたり、戦前の日本の植民思想が反映された歌詞を持つレビューが検閲を通ったりした。

### 4. 身体表現から何を「読む」ことが出来るのか： 日常の性風俗倫理に読み替える

②の具体的な身体表現で検閲されたのは、舞踊を通して身体が、性風俗に関する社会秩序を攪乱しないか、ということである。舞台上での具体的な身体動作、人と人の距離、衣裳の露出度などが、日常の社会規範における性風俗の倫理秩序へと読み替えられ、舞踊の具体的な動作や表現方法が修正あるいは禁止され、倫理規定が形成された。

### 5. おわりに

発表者は、これらの実態を、検閲の失敗や限界として「読む」のではなく、言葉や身体表現そのものを「読む」こと、言葉や身体表現が表現する何事かに読み替えて「読む」ことそのものの難しさとして捉えたい。検閲の実態を参考にすることで、我々が今日どのように舞踊を解釈対象として「読む」ことが出来るのか、また実際に「読む」行為を行っているのか、そしてそれが可能なのかを考える一助となるだろう。

主要参考文献・資料アーカイブ（抜粋）

山本武利(1996)『占領期メディア分析』法政大学出版局。

Hanna, Judith Lynne, (2002) "Dance under the Censorship Watch," *Journal of Arts Management, Law, and Society*, 31(4), Routledge, pp.305-317.

Leiter, Samuel L. ed., (2009) *Rising from the Flames: The Rebirth of Theater in Occupied Japan, 1945-1952*, Lexington Books.

中野正昭(2014)「占領期の軽演劇検閲」『Intelligence』(14)、早稲田大学20世紀メディア研究所インテリジェンス編集委員会、2014年3月、74-86頁。

RG331、Box5279-5305、NARA.

九州地区劇団占領期GHQ検閲台本、早稲田大学演劇博物館。

附記

本研究は、特別研究員奨励費 JP17J01064 の助成を受けたものである。